

離乳と子豚の下痢の 対策について

滝川畜産試験場 都築善作

繁殖豚経営を行なう人にとっても、肉豚肥育経営を行なう人にとっても子豚の哺育、離乳の上手下手、離乳子豚の良し悪しは養豚経営成否の半を決定する位重要な問題であります。それだけに養豚に關係する殆どの人々がこの問題に關心を持ち、哺育成績向上のため夫々苦心の研究を続けておりますが現実には依然として相当数の廢豚およびヒネ豚が出ており、養豚経営の収益性を低めている現況であります。その要因は極めて複雑なものであります。離乳前後の問題とその間におこる下痢症について若干ここで取り上げてみたいと思ひます。

一 離乳と離乳前後の問題

離乳とは子豚が母乳から完全に切り離されることをいい、離乳後は飼料だけで生きる。つまり一個の豚として自立することが認められる大切な時であります。従来は生後五〇日―六〇日位まで哺乳し、その間逐次固型飼料を採食し、消化器官を十分発達させて離乳が実施されておりましたが、最近養豚経営の多頭化、企業化に伴ない哺乳飼料としての人工乳の開発が急速に進み、早期離乳が比較的簡単に、しかも安全に実施できるようになりました。しかしながら

哺育並びに離乳の技術は色々高度のものがあり、細心の注意を払わないと失敗を招くこととなります。元来幼い動物にとって母乳は他に代え難いものをもっており、正常な母子豚である限り、できるだけ多く母乳を飲ませることが望ましいことであり、特に繁殖に供す子豚の育成については生後六〇日頃、子豚体重一二キタ前後で離乳することが望まれております。

(1) 離乳期前の子豚の飼ひ方

哺乳子豚は早ければ生後三、四日目より(特殊の場合)遅くとも二〇日目頃までに餌付けを行ない逐次哺育飼料に馴らさなくてはなりません。哺育飼料としては消化のよい栄養価の高い自家配合飼料を用いる人もありますが現在は優秀な人工乳が一般に市販されておりますのでこれを使用することが安全であります。

人工乳にはA(前期用)、B(後期用)の二種類があり、この他に早期用として特Aという製品を出しているところも二―三あり、その使用法は次のとおりです。

人工乳使用法(不連続給与)

特A 生後三―四日―一四―一五日

A 生後 一―五日―二五―三〇日

B 生後 二―五日―三〇―六〇日

成分、給与基準を示すと第一、二表のとおりです。

人工乳で哺育する場合の注意

最初餌付けをする場合は人工乳特AまたはAを用い、生後三日令―一四日令位の間に、古タイヤ、古ゴム長靴などゴム製品を活用して早く人工乳に慣れさせることで

第1表 人工乳の成分(%)

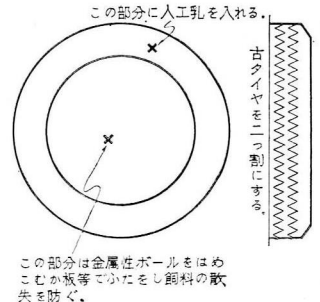
区別	水分	粗蛋白質	粗脂肪	可溶性色素	粗セシイ	粗灰分	DCP	TDN
特A	10.4	26.8	4.2	49.0	1.2	8.4		
A	11.0	27.2	6.1	48.4	1.7	5.6	19.6	74.8
B	11.8	22.1	4.7	53.6	1.9	5.9	16.4	70.5

第2表 人工乳給与基準(1日1頭当g)

区分	生後日数								計
	3~10	11~15	16~20	21~25	26~30	31~40	41~50	51~60	
特A	10~60	60~10							1,000
A		10~70	110	140	130				1,500 ~2,000
B					90	400	550	500	15,000 ~17,000

す。これは豚がゴム製品を好んでなめる習性を持っているからです。また一つの方法として甘味料を若干混ぜて与えると、味をおぼえて早く餌付けができます。

餌付用に使用する給餌器は子豚室の隅の方に置かないほうがよい。子豚は豚房の隅の方に糞尿を排泄しがちで、人工乳が汚れて無駄になり食べなくなるものです。粉状またはペレット状のものはそのまま与え、不連続給与とします。給水は一〇日令頃から始め常に清潔な水が飲めるよう一日に二―



三回取り替えてやるが必要で、特に酷暑には氷の入ったものを与えないよう、できればぬるま湯を与えることが望ましい。給水器の位置はできるだけ給餌器に近い方がよい。また最初から水の代りに牛乳とか山羊乳等はやらない方がよい。子豚室の保温と湿度に注意し、常に乾いたネワラを十分入れ清潔にして冷やさないようにする。新鮮な土や青草(ラデノクローパ類)を与えることは望ましいが青草は多量に採りすぎると下痢をすることがあるの

で注意を要します。また人工乳は変質しやすいので取扱上注意を要します。

(2) 離乳の方法

離乳は相当熟練を要するもので、母子豚の状態から判断してもっとも自然の状態で行なわれることが大切で、母乳を断つてもその子豚の発育に影響がないようにすることが根本であります。

a 普通の離乳法

子豚をできるだけ自然のまま離乳することが望ましいので、母豚は離乳の約一週間前から給餌量を漸減し、乳房の乾固をうながし泌乳量を減少させ、まれに起る乳房炎を防ぐようにします。五〇〜六〇日間哺乳させたもので子豚の糞がソーセージまたはバナナのような形状になったらまず離乳しても大丈夫です。

(イ) 徐々に離乳する方法 母豚の給餌量を漸減し、子豚は離乳予定日の二〜三日前から昼間は母豚からはなし飼料だけを与え、夜間だけ母豚と一緒にする。離乳当日は母豚の飼料を半減し十分に乾乳させる。この方法は自然で望ましいやりかたです。

(ロ) 発育のよいものから離乳する方法

同腹の子豚の中で発育がよく、飼料の採食量が多く、強壯のものから順次離乳し、弱小子豚の離乳を六〇日令位で終わらせる方法で、同腹小豚の発育が不揃いの場合に行なわれており、母豚の衰弱を軽減することはできますが、弱小豚が哺乳量が少なくなると急速に発育することは余り望めないようです。

(ハ) 急に離乳する方法 離乳前日の午後

および当日は母豚に全く飼料を与えないで、全部の子豚を同時に離乳するやり方です。この方法は母豚の衰弱が著しい場合とか、病気等の場合止むなしく行なう方法ですが、子豚は離乳後の急変により下痢等を引きやすいので十分の注意が必要です。

b 早期離乳法

早期離乳とは通常生後一ヵ月以内に離乳する場合を呼んでいるようです。人工乳の改善により生後二週令、三週令で離乳が可能になりつつあり、その効果も、子豚の発育が斉一になる、哺乳による母豚への増飼が節減される、繁殖能力の向上が望める、子豚の下痢や貧血を予防し発育や育成率を向上できる等極めて重要な問題解決に希望が持てるようになり、今後とも大いにその開発が期待されており、ただこの方法を実施する場合は、哺乳飼料の検討は勿論給与方法、離乳方法等相当高度の技術が必要とするので、管理する人間側の責任が極めて大きくなることを自覚しなければなりません。早期離乳実施上の注意事項は、

(イ) 生時体重の大きな子豚を分婉させる

(ロ) 生後三週令前後で体重五キログラム以上が望ましく、四キログラム以下の場合には遅らすことが安全である。

(ハ) 保温に注意し、できれば床面給温式で下腹部の保温が望ましい。子豚の適温は第三表のとおりかなり高く、適温以下が続くと活動が鈍り人工乳の採食量が低下する。

(ニ) 母子豚を分離する際、子豚をそのまま

第3表 子豚の適温表

週 齢	生時〜2週	2週〜3週	3週〜5週	育成前半(20〜50kg)	育成後半(50kg〜)
温 度	27°C〜30°C	24°C〜27°C	21°C〜25°C	18°C〜20°C	17°C〜18°C

ま残し母豚の方を他に移すとストレスを少なくし、離乳のショックによる弊害を最小限に予防できる。

(イ) 一斉離乳とし、午前中に行なう方がよい。

(ロ) 離乳当日は母豚に対し絶食し、給水のみ行なう。離乳後二〜三日は平常の程度程度の給餌量とし、乳房炎の予防に注意する。

(ハ) 離乳直後急激に子豚の採食量が増加し、過食によって単純性消化不良を起こすことがあるので、このような時には一〜二日間人工乳を制限給与する。

(イ) 子豚の中には乳頭恋しさの余り、子豚同士でヘソを吸いあたりするもので、臍帯炎をおこすので見付け次第クミチンキ、松ヤニ等苦くて無害なものを塗ってやる。

二 子豚の下痢とその対策

子豚の下痢症は非常に多く、その損耗は極めて大きなものであります。哺乳中の子豚の損耗は生産された子豚の約三割にも達し主として下痢症と圧死であります。下痢症の原因、状態には色々なものがあります。が主なものは二三について以下説明いたします。

(1) 母乳による下痢

生後間もない子豚にみられる食餌性の下痢症で、二三日令ごろにも起るが一週令位の時期にもっとも多く発症するものである。

〔原因〕

この時期の下痢の原因は殆ど母乳そのものにあり、①母乳が酸性の場合、②母乳にカルシウム分が不足する場合、③母豚の飼料が脂肪過多の場合、④、母乳中の脂肪の融点が高い場合などが考えられます。一方お産のときの寒さで子豚の腹を冷した場合母豚が乳房炎、産褥熱、熱性病など病気にかったときにもその子豚が下痢をすることもありま。

〔症状〕

下痢子豚は比較的元気でですが成長が遅れ、ときに死亡します。下痢は灰白色または鉛色の軟便を漏出し陰部がよこれ、尾を下げ活力を失います。

〔対策〕

先ず早急に母豚の給与飼料を改善することが大切です。母乳が酸性であり、カルシウム分が不足している場合は濃厚飼料を減量し、青草や根菜類の配合を多くしカルシウム剤を補給してやること。また母乳が脂肪過多のばあいは、米糠、魚のアラ等脂肪質飼料を減量し、融点の高い脂肪をつくる飼料、例えば大麦やイモ類を少なくし、代りに脱脂米糠、トキビ、魚粉などを適当に混ぜてやる。寒冷が原因と思われる場合は、乾燥したシキソラを豊富に入れ、赤外線電球などにより照射保温してやること。

〔治療〕

飼養管理の改善によって治療をはかることが望ましいが、治らないときは薬物療法によらなければなりません。

①母豚の飼料に一回三〇g位の重曹をまぜて二三日継続して与える。

②下痢豚の腎筋にインフエロン（デキストラン鉄）を二cc注射してやるときわめて効果がある。

③母乳と若干の飼料による下痢（白痢）生後二〜三週間内外のときにみられる下痢症で最も多発し、下痢便が白色を呈する。俗に白痢とよばれています。

〔原因〕

①母豚に与える飼料が原因するばあいが大部分で(1)で説明したほか、この時期が母豚の泌乳量が最も多いときで、しかも豚乳中の脂肪の含有量が最も多いときであるので下痢が多発しやすい。

②子豚の体質による。子豚はこの時期に母乳から貰った抗体が消滅し、自己の力による抗体が間に合わない期間ができて抵抗力がなくなるため下痢が起りやすい。また子豚そのものの体質が弱くとくに消化能力の弱い栄養不良の場合もあり、強壯のものが往々白痢になることもある。これは乳量過多に基因することも考えられる。

③飼養管理の失宜による。母豚の管理失宜で泌乳量が少ないとき、子豚が早く母豚の飼槽を餌食したため、また子豚の餌付け技術がまずかった場合、子豚の体を冷した場合等に下痢を誘発することが多い。

④このほか母豚の病氣、寄生虫、細菌（特に大腸菌）の感染等が原因となる。

〔症状〕

本症の下痢便は白色ないし黄白色で臭は少ないが慢性になると濃黄白色又は黄緑色の粥状または水様便となりひどい汚臭となる。病豚は腰をまげ腹痛の状を呈し、頭を下げ尾を垂れ元気がなく、死亡率はかなり高い。病期は大抵五〜七日である。

〔対策〕

本症は主として食餌性の下痢ですから早く原因をしらべ手当することです。

①母乳不良の場合は(1)のときと同じです。

②蛔虫の駆除をすることも大切です。

③単純な下痢の場合に限り里子に出し他の母豚に哺乳させるのも一つの方法です。

④産次ごとに子豚が白痢を起す場合は、その母豚の素質が繁殖豚として適当でないから除外した方が得策です。

〔治療〕

①軽症の場合はエビオス末を一回〇・二g餌にまぜ数日間連用する。また抗生物質飼料添加剤を給与飼料の1%前後添加してやるとよい。

②重症のものには、クロロマイセチンまたはオーレオマイシン五〇g（体重一kg当たり）内外与えるとよくききます。

③サルファ剤〇・五g、重曹一〇gを一、二〜三回投与する。

〔3〕離乳子豚の下痢

離乳子豚は環境と飼料の変化のため下痢をおこしやすく、この下痢は治り難く慢性化して発育を阻害する場合が極めて多い。

〔原因〕

下痢の原因は、飼料の過食、管理失宜、

寒冷、虚弱、寄生虫、長期輸送後の過食等色々の場合があります。

〔症状〕

軟泥便から下痢便となり次に水様便となり、次第に粘液を混じり悪臭を放つようになる。尾や内股部を汚染し豚房内を著しく不潔にする。下痢が長時日続くと瘦せて遂に弊れる。体温は若干上昇するが比較的元氣よく呼吸や脈搏は余り異常がない。

〔対策〕

単純な下痢はすぐ手当すれば数日で全治するが放っておくと慢性となり、バラチフスなどを誘発するから注意を要す。手当としては直ちに絶食して胃腸内を清掃し暖かくしてやるのが大切である。絶食後の給餌、給水は徐々に増量すること、下痢止めの薬剤はなるべく避けた方がよい。

〔治療〕

薬物療法としては抗生物質のクロロマイセチン、オーレオマイシンまたはストレプトマイシンなどを一〇〇g内外投薬すると効果がある。その他サルファ剤、消化整腸剤等色々あるが獣医師の指示を得て与えることが望ましい。

以上子豚の下痢は極めて複雑な要素を持っており、一度発生すると何等かの障害を残す場合が多いので、未然に防止することが何より大切であります。特に豚の発育速度は他の家畜に比べ極端に早いものだけに一寸した障害による発育の停滞は将来大きな差となって現われるものでありますから、子豚の管理、離乳等に際し、最大の関心を払っていただきたいものであります。